海外インターンシップの活動記録
-フィリピン共和国のマイクロファイナンス機関にて-
Internship Activities in Developing Countries: Case from Microfinance Institution in the Philippines

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科　博士前期課程　**岩本 陽平**
IWAMOTO Yohei
(Graduate Student, Graduate School of Global Studies, Doshisha University)

キーワード：フィリピン、マイクロファイナンス、海外留学

はじめに

私は同志社大学大学院(以下、本大学院)にて、途上国における国際開発についてフィリピン共和国（以下、フィリピン）を対象にして研究している。国際開発に関する専門的なカリキュラムを擁するいくつかの大学院の中から本研究科を選んだ理由はいくつかあったが、後に詳述する本大学院が持つ海外インターンシッププログラム制度[1]に期待するものがあったということは大きな理由の１つだった。本大学院は海外の大学・研究機関と連携協定を締結して、研究、教育での交流を積極的に行っており、海外の大学との連携に基づく現地インターンシッププログラムを制度として敷設している。フィリピンが抱える経済・社会問題や貧困状況、国際援助の仕組みなどについての机上での学びも重要だが、現地に赴くことでその現状を目で見て感じることも重要だと私は考えていた。そのことについて、途上国現地で活動して自身の研究活動を一層充実させるために､本インターンシッププログラムは非常に有用だと考えている。本レポートにおいては、自身がフィリピンの金融機関にて行ったインターンシッププログラムの内容、学びと気付き、その意義について記す。本レポートは一般に公開されるということなので、平易な文章で書くことを心がけた。

1.インターンシッププログラムの内容

私は 2013 年の 8 月から 9 月にかけて約 1 か月間フィリピンに滞在した。その時の

[1] 本研究科の HP の URL　http://global-studies.doshisha.ac.jp/

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

インターンシッププログラムに参加した学生は5名で、それぞれがフィリピンのような途上国を対象にした研究を行うことを志していた学生である。滞在中はフィリピン国立大学ロスバニョス校内にある、留学生向けの寮に宿泊した。宿泊施設は大学の担当教授に事前に予約していただいたが、それ以外の食事や小遣い、健康など日々の生活に関することは全て自分達で管理した。

それぞれの学生によって自分が持つ問題意識や研究課題は異なっており、主な関心は教育、保健衛生、市民社会であった。私はマイクロファイナンス(以下、MF)[2]と呼ばれる、貧困層を対象にした小規模のローン、貯蓄やその他の基本的なサービスを提供する金融の仕組みについて学ぼうと考えていた。学生によって異なっている調査要望を合わせることについては、渡航前に本大学院に調査したい分野の希望を提出し、それを基に本大学院とフィリピン国立大学が検討を行う。入念に検討された後に、フィリピン国立大学がそれらの要望に見合った機関をインターンシップ先として、私たちが渡航する前にアポイントメントを取るという形式になっている。最初の1週間はインターンシップ実習生として受け入れが決まっている機関にそれぞれ訪問を行い、改めて挨拶を行い、その他の情報交換を行った。

2週目以降はそれぞれの学生がそれぞれの機関のインターン実習生として、実際の業務に別々に参加した。私はフィリピンのMF機関としては国内最大の規模であるCARD MRI[3]を1週目に訪問し、インターン実習生としての受け入れ許可が下りた。2週目以降はCARD MRIを構成する金融機関の1つであるCARD BANK, Inc.[4]の南ロスバニョス支店でインターンシップ実習生として業務に参加した。MFの機関を実習先として希望した理由は、途上国における国際開発の分野ではこのMFが有名でその仕組みと効果は多くの人が認知しているからであり、実際に自分もその業務に携わってみたかったからである。2006年にバングラデシュのムハマド・ユヌス氏とグラミン銀行がノーベル平和賞を獲得したが、MFはその際に有名になった金融システムである。そのMFが多くの途上国に普及しており、フィリピンにもそのシステムが存在している。CARD BANKの南ロスバニョス支店が行っていたMF事業について説明すると、南ロスバニョス周辺の地域や村落のコミュニティに対して資金の融資サービスを貧困層の人々に対して行うというものだった。南ロスバニョス支店のみで57ものコミュニティ、962名を顧客としている。コミュニティとは、MFの融資サービスの顧客を複数名で括ったグループであり、1つのコミュニティの構成員の数は少ないもので5名ほどだが、多いものは30名ほどで構成されている。最初は融資を数千円からスタートし、1週間ごとに利子をつけて返済していた。融資の種類は住居ローン、農業ローン、教育ローン、他いくつかの選択肢があり、それぞれによって最初に借りるお金と返済時の利子率(5%～20%)が異なっている。生計が立てられない貧困層の人々にとっては、この融資が貴重であり生活に欠かせないものとなっている。

---

[2] マイクロファイナンスについては、「マイクロクレジット」という呼称が使われることもあるが、本報告書においてはフィリピン現地で使用されている「マイクロファイナンス」という呼称を使う。
[3] CARD MRIのURL　http://www.cardmri.com/
[4] CARD BANK, Inc. のURL　http://cardbankph.com/

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

図1 CARD BANKのスタッフが顧客の通帳を確認している様子

図2 コミュニティのミーティング風景

CARD BANK南ロスバニョス支店で私の活動は、午前中はコミュニティの顧客が集まって開かれるミーティングに同行させて頂き、MFの現場を見て回ることに努めた。このミーティングは1つのコミュニティ内にて毎週行われるものであり、CARD BANKのスタッフが取り仕切り、今一度返済の義務を周囲のメンバーと確認するというものである。流れとしては、まずCARD BANKの歌を皆で歌う。歌詞の内容が「皆で返済をしっかりと行おう」といった意味であり、メンバー間で返済への意識を共有して促す。その後にスタッフが一人ひとりの名前を呼び、お金の返済業務を行う。一人ずつ通帳を確認しながら返済を確認し、全員分が確認できればミーティングは終了である。それを毎日3～4回ずつこなした。ミーティングでは顧客にMFのサービスを受ける動機や、実際に役に立っているかなどの質問を行うことで、顧客が持っているMFに対する視線について理解することに努めた。また、スタッフに対しても業務上で不明な部分があれば随時尋ねることでMFの仕組みを理解することに努めた。これにより、ミーティングの必要性やスタッフのモチベーションなど、実際にその活動に従事して気づくことが多かった。

午後からは融資の未返済者の人々の家庭を訪問し、家庭調査を行い、返済を当方に促すという活動に同行した。スタッフがアンケート用紙を持って、家庭の収入源、1か月の収入と生活費、家庭構成、最近生活で困ったこと、悩んでいることがないかなど、未返済者の日々の生活について或いはその他多くの情報を問答するのである。興味深かったことは、未返済者の人々の家庭の状況や、その人々がどんな家に住んでいるのかを実際に確認できたことである。ロスバニョスは、中心に大きな通りが通っており、それに沿って飲食店やショッピングセンターが並んでいるのだが、脇道を逸れると驚くほど貧しそうな住宅が並んでいる。コンクリートの壁と土の地面でできており、6畳間ほどの広さの家で一人暮らしをしている老婆の方がいた。また、ベッドを買うお金が無いために一つのシングルベッドに子供4人が寝て、地面に両親が寝たりするような家もあった。都市部にて経済成長・工業化が進むフィリピンではあるが、地方に赴くと途上国の風景を未だに残している。このような家を一日に5軒から10軒ほど回った。2週間のインターンシップ期間中には計100軒以上の家庭を訪問した。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

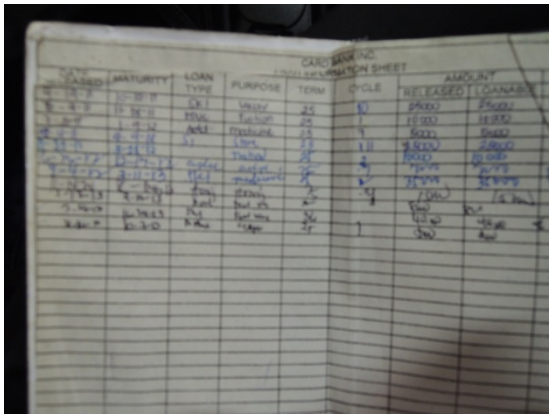

図3 顧客が受けているローンの返済を管理するための通帳[5]

図4 CARD BANK南ロスバニョス支店にて

上記のような活動を2週間継続した。例外的な活動としては、当時台風によりマニラ都心部が洪水状態だったのでボランティア活動として送る食料をパッキングしたり、CARD BANK, Inc.のオフィサーとお話をする機会を設けてもらったり、CARD BANKのスタッフと顧客コミュニティの友好関係を深めるためのパーティーに出席したりした。業務の中では私が携わることができない部分や、見られない資料もあったが、MFの仕組みと現場について理解することと、顧客の視点からMFを理解することは十分できた。CARD MRIが公開している資料も頂き、できるだけ目を通すことで、その機関についての理解にも努めた。CARD BANK 南ロスバニョス支店のスタッフには友好的に接していただき、朝から夕方までご飯を一緒に食べるほどの仲で、よく笑いあいながらジョークも言い合っていた。最終日には皆で夕食兼カラオケに行き、楽しい日を過ごした。「またロスバニョスに来たときは顔を出してくれ」ということも言われた。

最後の1週間は、環境保全を行っているNGOを訪問したり、フィリピン国立大学の教授が持つ農園の果物の採集を手伝ったり、首都マニラの中心部を見て回った。フィリピンという異国の地で様々な場所に行くと、様々な風景が広がっていた。印象的だったことは、工業化が進んでいる地域は大きなショッピングモールや飲食店などが立ち並びインフラの整備もかなり進んでいたが、農村部においては電気が通っておらず仕事はその地域では農業だけという現状であり、その生活のギャップには驚かされた。途上国では都市部と農村部との生活格差から様々な問題が生じているとは聞いていたが、そのことについて実際に感じることができた。

帰国後は、本活動についての報告書の作成が各学生に課される。報告書は、本学の国際課並びに本研究科向けのものを2種類作成した。

2.インターンシッププログラムの学びと気付き

本インターンシッププログラムの学びは、MFについての仕組みや効果についての適切な理解が促されたことが総じて学びであると言える。研究に資するような精細な調査や分析は行っていないが、現場に立脚した私の視点からの気付きを以下に挙げておく。

[5] 通帳の中に記載されている情報を判別できないように、写真を修整している。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（ｉ）MFの効果についての疑念

MFのサービスを受けることで、人々の生活水準が向上し貧困から脱することができるかどうかについて様々な議論がなされているが、本活動内においてはその兆候は確認できなかった。私が参加したミーティングにおいて顧客に対してMFのサービスを受けている期間を尋ねた。247名の顧客に聞いた結果、17%の人々が5年以上、52%の人々が3年以上このサービスを受けている。しかし、彼ら彼女らの家庭を訪ねたところ未だに採算が取れない園芸・農業を行っているケースが多く、また家の外見が依然として貧しい様子を呈していたことから、MFのサービスが機能しているのか懐疑的になった。したがって、顧客にとってはお金を融資してもらっても、その使い方の善し悪しや他の要因が関係し、生活の向上に結び付きにくいのではないのかということを現場において感じた。

（ⅱ）マイクロファイナンスの商業的役割

CARD MRIは元々非営利NGOとして出発しながら、MFの本格的な事業展開のために商業金融機能を拡大してきたという経緯がある。CARD MRIは経営方針として海外資金を得ながらも海外ドナーへの依存体質を作らないようにしており、一般市場から資金を募ることでその事業を展開している。したがって、MFのサービスを通じて利益を得ている金融機関である。元々、MFについては非営利の活動だと考えていた私にとっては、現場で見ている限り営利的な考えに基づいたスタッフ達が働いていることに驚きを受けた。スタッフ達には自分たちが行っているMFのサービスは単なる仕事であり、顧客の生活改善を促そうという意識は希薄だった。学術的には貧困削減に資する施策としてMFが語られがちではあるが、現場ではそれとはまったく異なる様相を呈していた。利益のみを追求して活動する彼ら彼女らの姿は、MFの商業的役割を象徴していた。

3.インターンシッププログラムの意義について

私が考える本大学院のインターンシッププログラムの意義について2点述べる。1点目は、途上国における国際開発についての理論や考えを日頃の授業などにおいて温めておき、実際に現地に足を運びそれを確認することができることである。私の場合はMFの内容や議論について元々知っていた部分があったため、それを実際の現場にて確かめようという具合である。現場においては自分が持っている仮定が当てはまる、或いは裏切られることが生じるため、さらに研究意欲が湧くのである。修士論文の執筆においても本プログラムは役に立つであろう。

2点目は、途上国に携わることができる進路に対する思いを大きくすることに繋がることである。インターンシップにて経験した同様の活動を行える国際機関に勤めてみたい、研究者として途上国の事象をさらに学びたい、民間企業にて現地の経済成長に貢献できるプロジェクトに携わりたいなど、将来的に途上国に携わることができるキャリアを現実的に考えることに繋がる。本研究科の人材養成目的として、国際機関、公共機関、国際ビジネスに携わる企業等、異文化社会間の国際交流・理解の推進に貢献できる専門的人材を養成することを掲げているため、この点からは本インターンシッププログラムはその役割を果たしている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

さいごに

本研究科においては、上述したような海外インターンシッププログラムがあり、提携している各種学術機関に学生を派遣し、その学生の問題意識に合った調査を行うことを支援している。また、資金面においては本学大学院生の外国派遣に対する奨学金、JASSO からの奨学金の補助、本研究科独自の制度の３つが受けられるようになっているため、資金面でも学生にとっては大きな助けになっている。このような制度について、所属する学生が海外で研究活動を行う可能性のある大学院が、学生にとって充実した研究環境を整えるために、本インターンシッププログラムを一例として参考にしてもらえればと思う。また、本レポートを読んだ学生に対して、途上国研究にチャレンジしたいという気概があるのであれば、こうした制度を備える大学院への進学について積極的に検討してみることをお勧めする。

＊　本記事については、本マガジン『留学交流』４月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

【事例紹介】
海外提携校を通じたインターンシップ・プログラム -途上国の例を通じて-
同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科　小山田　英治
（http://www.jasso.go.jp/about/webmagazine201404.html）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.